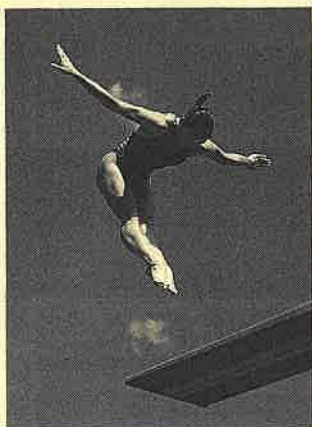


Women's Sports Foundation Japan

WSF Japan News

'98 August Vol.36



- Mail Box/前略 会員の情線へ エッセイ 三谷洋子 2
- Interview/サッカー初の女性国際主審 渡辺弥生さん 3
- Women's Sports/女性スポーツの歴史を考える(下) 6
- Report/世界女性スポーツ会議雑感 島谷順子 7
- Column/「はばはば母より強し」 吉田寿子 8
- Enjoy Sport!/グラウンド・ゴルフの普及にかかわって15年 戸塚直佐子 8
- Hot Line/会員の広場 9
- Topics/各紙掲載記事より 10
- Information/事務局だより 11



Mail Box

前略 会員の皆様へ〈第8信〉

WSFジャパン代表

三ッ谷洋子



目下『どこにしようかしら』と頭をかき上げてゐる。
(中略)

△△

文子さんは学校でやる運動競技は何でも得意。殊にハードル、高跳、水泳等は全くその独壇場で、常に校内でのレコード・ホルダーだ。昨年女子陸上競技でも、同じく十一月の第二高女との聯合大会でも、異数な成績を示して女師軍の重鎮であった。水泳も房州で沖の島、高之島遠泳を試みて敢て人後に落ちなかった。彼女があゝの十四貫余の若々しい処女の血に漲った軀をゴム球の如くに跳躍せしめる時、その鮮やかな技は、全く感嘆詞なしに見る事はできない。しかも一度競技を終ると、文子さんは優しい処女にかへって、人の目に掛るのを恥づるやうに、顔を赤くしてコソコソと隠れてしまふんだ。これらは、無邪気な日本の娘の性格を多分に持っている文子さんだからである。

△△

学校に文子さんをインター・ヴューすると、流石師範学校だけあって体操教師、立会の下でなくてはお目にかゝれない。青い毛糸のジャケットにふくやかに発達した身体を包んだ文子さんは、じっと俯向いて顔を赧めてゐたが、やがてアルトで語り始めた。

『私は尋常三年の時から今日迄お医者さまの手を煩はしたことはないのです。之も運動のお蔭だと思つてゐます。だけど頭なんか駄目ですわ』

とぎれ勝ちな彼女の最後のことは決して真実ではない。受持教師の言ふ『思考力が発達してゐる』彼女の得意の学課が数学であるのに徴しても、その一斑が窺はれるのである。

言葉づかいも現代とは違いますが、特にアンダーラインを引いた部分に、隔世の感を覚えます。皆さんはどう思われますか。

女性のスポーツは、その社会が描く“女らしさ”というイメージに大きく影響を受け、普及・発展の足かせとなっていました。スポーツで要求される身体活動が、静的であることを求める伝統的な“女らしさ”とは相反するものだからです。

先日、たまたま『朝日新聞100年の記事にみるスポーツ人物誌』(1979年、朝日新聞社発行)のページをめくっていて、とても面白い記事が目に入りました。大正13年1月14日から6回にわたり「スポーツウーマン」というタイトルで連載された記事の一つです。(読みやすいように、原文にはない読点を入れました。)

～大正時代のスポーツウーマンは

“優しい処女”～

炬燵(こたつ)で編物の毛糸をかなぐり捨てよ。デパートメント・ストアの日参をおやめ! 高原の雪は氷は、若い婦人達をも待ってゐる。かくて今年の冬、田口に赤倉に五色に、それから諏訪に、沢山のスポーツ・ウーマンが出かけて、白粉やけよりも尊い雪やけの自然美を味わひ、縫針のさゝった痛さよりも違った、擦過の傷の痛さを知った。

この両三年来、スポーツの波は漸く日本の婦人達をも襲つて来たが、まだまだ一部特殊階級や学生達に限られてゐる。これが一般化される時、国民体質の問題の解決される嚆が来る。

△△

こゝに紹介する矢野文子(やのふみこ)さんは運動界では可なり知られた水陸何でも来いの、熱心家だ。竹早町の女子師範が生んだ此の代表的選手は本年十九歳。この三月にはいよいよ卒業するのだが、文子さんのお父さん、印刷局の矢野道也氏は個性尊重の教育主義から『自分のいゝと思ふ学校へどこへでも…』と言って敢えて干渉しない。文子さんは

Interview

サッカー初の女性国際主審

渡辺 弥生さん



●渡辺 弥生(わたなべ やい)さん 写真撮影/氣賀恭子

近年、国際舞台での女性の活躍は男性を凌ぐものがあります。先頃のサッカー・ワールドカップ。男性が主役の大会でしたが、サッカーの国際舞台でも少しずつ女性が進出してきています。世界で60人しかいない女性の国際主審に、日本の女性として初めて選ばれた渡辺弥生さんも、その一人です。

◇

》やっとスタートラインに立てた《

— フランスのワールドカップ、日本国内でも大騒ぎでしたね。大会の感想はいかがですか。

「日本チームがワールドカップに出たことは、1勝もできませんでしたが意味はあると思います。プレーヤーと一緒に岡田正義さんが国際主審でいったことで、私にとっては一番、身近に感じられたワールドカップでした。岡田さんからはフランスからハガキをいただきました。

全日本チームには今回の悔しい思いを2002年につなげていって欲しいですね。いきなり勝ってしまうより、原点に『悔しい』という思いがあるほうが、いいと思います」

— ワールドカップでは女性も審判ができるのでしょうか。

「男子の大会は分かりませんが、女子の大会は女子が審判をするというのが、世界的な流れになっているようです」

— 日本女性では初の国際主審になられたわけですが、ご感想は。

「これまでの目標が国際審判になることだったので、いざ自分がその目標を達成したとなると、実感がわきません。やっと本当の意味でのスタートラインにつけたというところです。(国際審判という)専門職は、国際主審と国際副審に分かれています。2つに分けた方がゲームをうまくコントロールできるからです。私が目指したのは国際主審です。

23歳の時、国際副審になろうと思ったことがありまし

1971年3月11日、神奈川県生まれ。神奈川県立田奈高校で男子サッカー部に入学し4級審判員の資格を取得。選手、審判として活動。89年、日本体育大学に入学し、女子サッカー部に入り選手として全国大学女子選手権に4年連続優勝、審判としても活躍する。93年に卒業し、審判活動に専念。96年より1級審判員。女子のLリーグの他、広島アジア大会など国際大会の審判歴がある。YMCAスポーツ海洋科学専門学校勤務。

◆◆◆◆

だが、25歳以上(が条件)ということで断念しました。この時、28歳の吉澤久恵さんという方が国際副審になりました。私は15歳から審判と選手とを両立してきたのですが、先を越されてしまったということで、悔しい思いをしました」

— これまで紆余曲折があつたのですね。

「でも後で考えると、これでよかったと思っています。副審から主審の資格を得る場合は、副審をやめて1年間のブランクをおいて実力を認めてもらわなければなりません。そして初めて日本サッカー協会から主審に推薦をしてもらうことができます。

ですから結果的には、ダイレクトに主審になった方がよかったのだと思います」

— 実際の試験はどのような形で行われるのですか。

「まず、日本で一般審判員になり、女子のトップリーグ(Lリーグ)で2年間、審判をしなければなりません。そして日本サッカー協会がFIFA(国際サッカー連盟)に推薦し、FIFAが認定するという形で、今年1月1日付けで登録されました」

— 選手と同様に、自分の仕事ぶりがすべて観衆に見られてしまう審判というのも、やはり厳しいですね。

「場合によっては国中が一喜一憂するような状況で判定をしなければなりません。ワールドカップのような大会では、毎日ミーティングをして、どこが良かったか悪かったかを反省します。失敗をすると首を切られてしまう、すごくシビアな世界です。

今年、私が国際主審になったからといって、来年も大丈夫という保証はありません。ミスしたら首です。資格は毎年毎年の更新です」

》世界を目指せるサッカー《

「それにしても私はとても運がいいと思います。先日のキリンカップサッカーの男子の試合の前に、女子の米国対日本の試合が横浜国際競技場でありました。当初、担当の予定だった中国の人がケガをしてしまい、私が受け持つことになったのです。何万人もの観客がはっている試合で審判ができたのは、運がいいと思います。特に米国は世界チャンピオンで憧れていたチームでもありました」

— 渡辺さんは選手から審判になられたそうですが、キッカケは何ですか。

「高校に入学した時に、世界を目指せるスポーツということで、サッカーを始めました。(女子サッカー部が無く)男子サッカー部に入りました。一緒に練習はしていたのですが、公式試合に出られなかったので、4級審判員の資格を取りました。



目標はワールドカップで主審を務めること

通常、4級審判員の資格を取った後は、まず子供の試合の審判をします。それが、いきなり高校の試合の審判をして、えらく文句をいわれたことがあります。当時、父が私のサッカー部の監督をしていたのですが、『ここでやめたら、一生レフェリーとしてフィールドに立てなくなる』といわれ、涙をこらえてやりました。

味方であるはずの仲間から文句をいわれ、とてもつらい思いをしました。高校3年間は精神的にも肉体的にも大変でした。この3年間の苦い経験が、現在の精神的な基盤となっています。自分のこんな経験があるので、他の女性審判にもアドバイスができると思います」

— 審判の資格は男女同じなのでしょうか。

「4級から2級は同じです。1級は男性と女性の体力が違うので別です」

— 高校時代からこれまで男性の試合も審判されてきたわけですが、女性との違いなどを感じられることはありますか。

「ゲーム展開が早く、ハイレベルな高校の試合などは、ガンガンいくので見ていて怖くなるほどです。女性もLリーグなどになるとうまいですしやりがいがあります。

10代の時は、年上の男子のゲームをコントロールするのが難しかったですね。27歳になって、レフェリーなんだという意識を強く持とことで、一つのカラを破れたと思います。今は女性でもできるんだという事を分かってもらえるよう、常にベストのレフェリングを心がけて、試合ではいつも命がけでやっています」

》「なんで女性の審判なんだ」《

「常に心がけているのは、選手にケガをさせてはいけないということです。ケガをさせるものには強気で当たらなくてはなりません。一番大切なことは、信頼関係を作りながら、スムーズなゲームコントロールをしていくことです。以前、男子の試合の審判をする時は、私自身を強く見せなければいけないとか、なめられてはいけないと思い、トゲトゲになっていました。

1級になった時に、浅見委員長(前日本サッカー協会審判委員長)に『一番大切なのは、選手と信頼関係を保ちながらゲームをコントロールしていくことだ』といわれました。そしてそれまでの私のレフェリングは、選手のためでなく、自分のためのものだったことに気がきました。いいレフェリーは、心のゆとりが無いとできないと気が、それまでのレフェリングが180度変わりました」

— 女性だからということで、困ったことはありませんか。

「以前は『何で女性(審判)なんだよ』と、よくいわれ

ました。でも、そういう経験が悔しさにつながり、今の私があるわけで、感謝しています。全て悲観的に考えていたら暗くなってしまうので、プラス志向でとらえています。

更衣室がなくて、辛かったこともありました。また、関東に女子の審判が集中しているので、それ以外の地域にいくと、もの珍しく見られます。同じ審判仲間だと思っても、一級研修会などでは当初、女性は2人しかいなかったの『この子はどういう子だろう』と、不審に思われました。探られているようで本当に気が抜けない時もありました」

— 現在、女性の審判は何人ですか。

「1級が私を入れて4人います。女子トップのLリーグは1級審判が担当します。通常、女性の審判だけで行っているの、男性審判がいるとおかしいと思われるようになりました」

— 審判の仕事はどのくらいあるのですか。

「Lリーグの試合の他、社会人やジュニアユースの試合など週に1日ぐらいです」

》ヒステリックでも弱気でもない女性審判《

— 今までで最も記憶に残る試合は何ですか。

「一番感動したのは、昨年全日本女子サッカー選手権大会の決勝を、初めて国立競技場でやった時です。それを女子4人の審判でやることになりました。国立競技場に初めて立てたということに、すごく意味がありました。サッカー協会の偉い方がたくさん見に来て、初めは『女子の審判で大丈夫なのかなあ』と思われていたようです。

日興証券ドリームレディースと読売ベレーザの試合でした。選手も頑張り、いいゲームコントロールができました。この時、取材に来られた方から『女性の審判だとヒステリックになるか、弱気になって流されてしまうかのどちらかと思っていたが、そのどちらでもなかった』といわれました。そして、選手とのコミュニケーションの取り方や、判定に際しての決断力をものすごく評価してくれました。ここで失敗したら元も子もなかったのその意味でよかったと思います」

— プライベートなことをお聞きますが、最近結婚されたそうですね。

「知り合ったのは、私が審判をやったのが縁です。国際主審になった年に結婚に踏み切ったということは、他の人から見ると何故、と思われるかも知れません。これから3年くらいは、国際主審として大変な時期が続くと思います。この大変な時期を一人で過ごすのか、一緒にやっていくのか。ダンナ(渡辺さんは夫をこう呼ぶ)が『一番大切な時期を見て過ごしたい』といってくれて、一緒に世界を目指してやっていきたいと思いました。

彼は『私が結婚して下手になったとかやりにくくなったとか思われたくない』といっているんです。私自身も結婚してさらによくなったといわれたと思います。ダンナは私が来年のワールドカップに(国際主審で)いけることをものすごく期待し、応援してくれています。『一緒に世界を目指していこう』といっています。家ではまったく手がかりません。料理をしたり協力的です」

— 最後に今後の目標をお聞かせください。

「短期的には、来年のワールドカップの出場です。アジアからは1~2人の枠なので今年、国際主審になったばかりの私はどうなるか分かりません。12月のアジア大会(バンコク)での評価によると思います。国際審判員に必要なのは英会話と、一試合を通して一定の判定基準を下せる体力です。今、英会話のレッスンをしています。

また、長期的にはサッカーの審判は、私自身の生涯スポーツととらえています。国際審判員の定年は43歳ですが、その後は国内でやっていきたいと思います。それと並行して後輩を育てる事も考えています。多くの人に女子審判のことを知ってもらうため、行動していかなければなりません。後輩たちは絶対に私を追い越して行って欲しいし、そうならなければいけないと思います。でも今は負けません」

◇

「まず、皆さんにサッカーのことをわかりやすく説明するのが私の仕事です」インタビューを始めて最初にこう話された渡辺さん。そして「審判として後にくる人たちのために、言うべきことは我慢しないで言うことも私の務めです」ときっぱりとおっしゃっていました。とても穏やかな語り口でしたが、サッカーに対する情熱が終始感じられたインタビューでした。

(6月30日取材・聞き手/WSFジャパン事務局長・高橋昭子)

Women's sports

女性スポーツの歴史を考える (下) —上智大学の学生レポートより—

前回に続き、島健さん(WSFジャパン会員、上智大学助教授)の講義「女性とスポーツ」を受講した学生のレポートから、興味深い感想をご紹介します。(事務局)

◆女らしいスポーツ、男らしいスポーツ

一般に観客としてスポーツを見る時は“女性のスポーツ”“男性のスポーツ”と明確に分けて受け取られているようです。「男らしいスポーツ」「男の方が面白いスポーツ」としてラグビー、アメリカンフットボール、サッカー、格闘技全般があげられています。

一方、「女らしいスポーツ」としてはシンクロナイズドスイミング、ラクロス、バレーボール、テニス、新体操などです。このような回答は男女共通のものでした。

一般的に男性らしさの特長とされてきた「力」と「スピード」、女性らしさの特長とされてきた「優雅さ」と「しなやかさ」が、そのままスポーツの色分けの物差しとして使われていることが分かります。

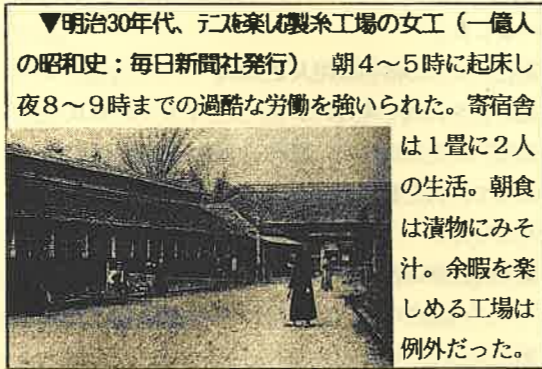
しかし一方、「スポーツにおいて男女の差が出てしまうのは残念です。男性の方が優れているとは思いますが、女性が男性と同じようにスポーツをすることを受け入れて欲しい。スポーツをする時には、男性らしい女性らしいというのは、あまり関係ないのではないのでしょうか」と、“するスポーツ”では男女平等が当然であるべきだと、ある女子学生は記述しています。

◆女性としての配慮を

「今日の(明治初期から現代までの女性とスポーツのかかわりをまとめた)スライドで学んだ女性スポーツの歴史は、本当にすごいものでした。オリンピックに参加できるようになったのが比較的、最近のことだと知って驚きました。また、年を追うごとに女性のスポーツだけでなく性に関する考え方が変わっていくのがわかりました」と、女性スポーツが時代と共に大きく変化してきた背景にまで関心を示した学生もいます。

近年、女性があらゆるスポーツに進出するようになっ

ています。この傾向を心配する記述も、少なくありませんでした。「マラソンの女子選手の体を見ると胸が全く無い。体中の脂肪が無い枯木のような体だ。そこにストイックな美しさを感じる人もいるようだが、私は女性の“女性らしさ”が追いやられてしまっていて、女性の体に男性性を植えつけて走らせているような気がする」「女性なら女性に適した配慮があってもいいと思う」「しっかり健康管理をするべきだ」と、いずれも女子学生の鋭い指摘です。



▼明治30年代、 textile 製糸工場の女工(一億人の昭和史:毎日新聞社発行) 朝4~5時に起床し夜8~9時までの過酷な労働を強いられた。寄宿舎は1畳に2人の生活。朝食は漬物にみそ汁。余暇を楽しめる工場は例外だった。

◆男女共習には賛否

今回の授業を受講した学生たちは「物心ついたときから、すでに男女平等をうたっていた」という時代に育ちました。ですから「戦前は男女差別が激しく、女性はスポーツができなかったという話は、信じられないし想像もつかない」ようです。

これからのスポーツについて多くの男子学生は「女性が大いに進出するべきだ」と肯定的に捉えており、「時には男女一緒にスポーツを楽しみたい」という希望もありました。「できれば僕のやっているラグビーを、一緒にね」という提案(?)も。

しかし、実際に高校時代を米国で過ごした経験のある男子学生は、戸惑いの体験を書いています。「レスリングのチームに女の子が一人いた。練習をやった時にとってもやりにくいと感じた。その子は女でもできているのかも知れないが、男からしたらいい迷惑である」と、コンタクトスポーツでの男女の共習に疑問を投げかけています。女性スポーツのあり方は、男性スポーツをも含めたスポーツ全体のあり方から考えるべき問題だということでしょう。(終)

◆ Report ◆

◆ 世界女性スポーツ会議 ◆ ◆ 雑感 ◆ ◆ 日本の公的機関にも女性スポーツ担当部署を ◆ ◆ 梶谷順子 ◆

5月にアフリカのナミビアで開催された「第2回世界女性スポーツ会議」に参加した。かねてから関心のあった女性スポーツの世界会議というものに興味を持ったこと、4月から私自身の環境が変わり時間に余裕ができたこと、そしてまだ足を踏み入れていなかったアフリカへの憧れ——という軽いノリを含めた動機での参加だった。しかし申し込みはしたものの、ナミビアから会議についての具体的なインフォメーションは一切なく、行けば何とかならうと半ば不安な気持ちで出発した。

首都ウィントフークに到着すると出迎えがありホッと安心。初めて見るアフリカの大地の広大さに感動しながら会議場へと向かった。市街地からかなり離れた郊外のゴルフ・カントリークラブが会場だった。宿泊場所はそこから更に4km離れた所。共に周りには何も無い。ただ、このデラックスな建物があるだけという——まさにアフリカ——。かくして私の住む仙台からウィントフークまで片道28時間をかけて参加したこの会議を通して感じたことを、雑感風にまとめてみた。

1. スポーツをする世界の女性たちの建設的で前向きな姿勢に感動するとともに、女性パワーの未来への希望と発展を確信した。会議には73か国から200人以上という代表が集まり、女性会議という名にふさわしい華やかな雰囲気だった。(いつも男性ばかりの中で仕事をしているので余計にそう感じるのか。)場所柄もあり、アフリカ各国の女性の参加が多く、多彩な民族衣装を披露してくれた。どの女性も堂々とした態度とスピーチが素晴らしかった。

2. 会議の4日間を通じてスポーツ界における女性の立場の確立と発展を目指そうという熱気がいっぱいだった。大陸ごとの分科会では身近な国の報告に親しみを覚えた。しかし、女性の問題はスポーツのみではなく、先に行われた北京女性会議が存在するように、多岐にわたる社会構造に起因する問題と切り離して考えることはできない。根底にある女性問題を社会の一員としてスポー

ツを通して前向きに働きかけることの必要性を再認識した。

3. さて、日本ではどうだろうか?女性スポーツ指導者が実質的にこれらの問題について取り組む組織が必要なのではないだろうか。選手の教育・育成・強化の発展を目的とし、女性指導者の資質の向上・活躍の場の公平な提供をおこなう。そこでお互いに研鑽を積み、組織として機能する。女性指導者の立場の確立のために活動する大きな柱としてのそんな組織が欲しい。

今回の会議に出席していたのは、各国の公的機関の女性スポーツ担当局のような部署から、公務として派遣されてきた女性代表が多かった。

4. 語学力の貧弱さを自覚した。日常のコミュニケーションや自分の専門分野では今まで不自由を感じなかった英語に今回は4日間、悩まされ続けた。会議場には同時通訳の設備も整っていた。しかし日本語は無かった。世界における日本語の勢力度合いを見せつけられた気がする。通訳が欲しかった。人間の持ち得る能力を英語力に左右されて発揮できないとしたら、何ともったいない?!英語の勉強という宿題ができた。

5. アフリカの大自然。ちょうど春の日本とは正反対の季節で、秋で乾季であった。毎日毎日、澄みきった青空と空気。ここで呼吸しているだけで、心も体も浄化されるようだった。

第2回世界女性スポーツ会議概要 1998年5月19~22日
(Second International World Conference
Women in Sport)

会場: ウィントフーク・カントリークラブ・リゾート

主なテーマとスピーカー

▲オリンピック・ムーブメントに於ける女性振興=IOC副会長:A・ツァツツ(米国) ▲ICSSPEに於ける女性とスポーツ=ICSSPE会長G・ド・ルティエ(フランス) ▲成功例=英国スポーツカウンスル:A・ホワイト(イギリス) ▲「体育」M. ヴェルボ(英国)、「リトアニア」N. E. M. ペス(エストニア)、「健康・医学」、「スポーツ組織」S. ニール(カナダ)、「身障者」B. ノイ(ジャマイカ) ▲女性のグローバル発展における役割=オーストラリア大臣:E. 元スラ、南アフリカ法務副大臣:M. T. ゴンザレス、▲「家族」M. マルガ(カナダ)、「文化的発展」M. オスレー(ベルギー)、「人権」A. オアマ(カナダ)、「テクノロジー」M. シン、▲「教育」C. 江村

(しまや・よりこ) WSFジャパン会員、国際柔道連盟A級審判員

Column

「ばば」は母より強し
パワーリフティングは女性の生涯スポーツ
吉田寿子

「2人目の孫が生まれました。女性は母になると強くなると申しますが、「ばば」になるとすごーく強くなります」。こんな暑中見舞いをいただいた。

私がかかっているパワーリフティングは、スクワット（立つ）、ベンチプレス（押す）、デッドリフト（引く）の3種目がある。バーベルと聞くと、「男性のスポーツ」と思われそうだが、どの種目も日常の動作を基本としており、女性でも簡単に取り組めるスポーツである。ハガキの彼女は40歳を過ぎてからバーベル運動を始め、今ではパワーリフティング競技で自己の記録をぐんぐん伸ばしている日本期待の選手だ。

寿命が短かった時代に「母は強し」といわれた女性も今では「ばば」で一層、磨きがかかるということだろう。そんな「ばば」は身近にもいる。義母は60歳になって突然、車の免許を取ると言い出した。自転車にさえ乗ったことがない。しかも還暦を迎えている。私の子供2人を自転車の前と後ろに乗せ買物に出かける姿を見て、「昔の上品な人は自転車などに乗らなかったものよ」と

いった人だ。ましてバーベルに生き甲斐を見つけている私は、義母にとって全く困った嫁なのだ。

そんな義母が車の免許を取るなどとは、どう考えても無理だとは思えない。親戚一同の猛反対にもかかわらず、1年かかって免許を取得した。おまけにスポーツとは無縁で過ごしてきたのにゴルフまで始めてしまった。

義父は「年寄りの冷や水」と渋い顔をしていたが、義母はせっせと車でゴルフ場に通り、ビデオでフォームを研究し、ぐんぐんスコアを伸ばしていった。以来10年。運転は無事故無違反。ゴルフは「ちょっと海外のコースにいくから、お留守お願いね」という腕前にまどなった。「こんな面白い世界が人生にあったのね」と、ますます元気だ。



▲ 美人リフター必須科目

パワーリフティングという競技は文字通り生涯スポーツだ。14歳から70歳まで現役として活躍している選手がいる。一人でも多くの女性に「パワーリフティングって面白いのね」と知ってもらいたい。それが私の役割だと思っている。

〈よしだ・としこ〉 WSFジャパン会員、日本パワーリフティング協会事務局長、国際1級審判員

パワーリフティングという競技は文字通り生涯スポーツだ。14歳から70歳まで現役として活躍している選手がいる。一人でも多くの女性に「パワーリフティングって面白いのね」と知ってもらいたい。それが私の役割だと思っている。

Enjoy Sport!



日本海に面した鳥取県泊村で開発されたグラウンド・ゴルフは、早いもので15年が経過しました。生涯スポーツの基本理念である、いつでも、どこでも、だれでも出来るスポーツとして誕生し、国内はもとより海外にまで普及・振興してきました。サイパンでは毎年大会が開催され、島民にとって楽しいスポーツとなっています。1本のクラブ、ボールで、ホールポスト（36センチの輪）に何打で入るかという簡単な遊びです。標準コースは8ホール（勿論距離は決まっています）。誰でもが優勝出来るチャンスがあります。

日本協会の登録会員は8万人を超え、今年は第11回全国グラウンド・ゴルフ交歓大会が秋田県太田町で開催されます。来年以降は京都、熊本、富山と続きます。各県で開催したいと次々に手を挙げて下さることは、本当に嬉しいことです。私は15年前の7月26日、縁あって全国体育指導委員連合事務局にアルバイトで入り、翌日がグラウンド・ゴルフ協会の設立総会でした。このお手伝いがキッカケで結局、この道一筋となってしまいました。普及という仕事は数字ではなかなか表せないもの。各地へ出向き自分のこの目で確かめることが唯一、手応えを実感する時です。会員の方々はグラウンド・ゴルフを通じて様々な出会いのなかで笑ったり、感激して泣いたり。お互いに豊かな心で交流が持てればと思います。今後も一層皆さんの為に努力していくつもりです。応援してください。（WSFジャパン会員、日本グラウンド・ゴルフ協会事務局長）

Hot Line 会員の広場

♥男性主導の五輪ボランティア組織

川嶋 和子 (教育相談員)

生涯なんらかの体育・スポーツとかかわっていたい、というのが私の人生テーマですが、最近のかかわりは、なんといっても長野オリンピックのボランティアとして、白馬村のクロスカントリー会場で警備スタッフとして参加したことです。5年前にボランティア登録をしてから語学等のボランティア研修を積んでいよいよ本番となり、自分としては地元長野のボランティアとしての誇りと自信を持って業務に当たりました。観客に直接かかわる仕事は、女性のソフトさを生かしてほしいという上部の主旨で女性が前面に出た持ち場でした。忙しい時は5時間以上も立ちづくめでしたが、自分の仕事に責任をもって取り組むすばらしい女性たちの集まりでした。しかしこのグループの責任者、上部スタッフには女性がほとんどいないのです。急ごしらえで担当をあてがわれたような男性スタッフは、オリンピックに向かう姿勢や観客に対する配慮も不十分で、ボランティア研修を受けてきた私達とはどこか精神的にずれを感じました。全日程を通じて私個人のボランティア活動は完全燃焼をしましたが、大きなスポーツイベントでの女性の登用に対する私の不完全燃焼はいつまで続くのでしょうか。まだまだ男性中心の組織の改善に一步進まなければならないと痛感したオリンピックでもありました。（長野県安曇野郡在住）



♥女性に門戸開放を始めた回教国

田中 良子 (国際・日本陸上競) (長連盟女子委員)

現在、アジアと日本の女子陸上競技を発展させるための仕事に従事しています。7月にアジア陸上競技女性役員との懇談会、11月に東京国際女子マラソンの20回記念シンポジウム、歴代優勝者とのトークなどを計画中です。

今年は国際女子陸上競技年として、世界各国で活動が展開されています。日本の女子委員会では、アジア各国



の取り組みや、陸上競技に関する女子委員会などの組織の有無などについて調査をしています。そこで大変嬉しいニュースを報告したいと思います。（既にインターネット、AIPS NEWS などでも報道されています。）

アラブ諸国の一つカタールでは建国以来、宗教上の理由で、女性がスポーツを見ることもすることも禁じていました。今年が女子陸上競技年ということもあり、カタールで5月に初めて女子の国際ワークショップが開かれました。テーマは「Towards the Millennium -The Growing Role of Women in Sports and Society」（千年期に向けてスポーツと社会で増大する女性の役割）です。このテーマには歴史的、社会的に大きな意味が含まれていることが感じられます。このワークショップの成果として、カタールでは女性が競技会でスポーツを見る事が許されたと報じられています。近い将来には女子選手が誕生するものと期待されます。（東京都杉並区在住）

♥子供の可能性を引き出す指導を

島野 伸子 (コグマススポーツ) (クラブ主宰)

社会体育教育、幼児体育教育の仕事をしておりました時、友人・知人とその子供たちのテニスの相手を務めることになりました。それが今、私が主宰しておりますコグマススポーツクラブの第一歩でございます。以来25有余年、周囲の全ての皆様のご協力で、活動を続けております。基本姿勢は、私が教育を受けました女子学習院、東京女子大学の教えにあり、人の道（倫理）はどんな世であっても一つという信念でございます。

クラブ員は小学1年生から高校3年生まで。12月・3月のスキー、8月のサマーキャンプが現在の活動です。合宿中、子供は年長者から良いこと悪いことを学びます。スキーの指導ではグレンダを選び、子供の興味を増すように遊びを入れ安全に楽しく、かつ大胆にスピードに乗って長い距離を滑らせます。子供は体で自然に覚えます。この方法で年間10日間ぐらいいしかスキーに乗っていない子供たちの中から、SAJ1級の取得者も出て、初心者指導の方法が間違っていないことを再認識いたしました。子供たちが喜色満面何かをしている姿は実にすばらしいものです。（東京都杉並区在住）

